

## 開目抄下

又今よりこそ諸大菩薩も梵・帝・日月・四天等も教主釈尊の御弟子にては候へ。されば宝塔品には、此等の大菩薩を仏我が御弟子等とをばすゆへに、諫曉かんぎょうして云はく「諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に、誰か能く此の経を護持し読誦せん、今仏前に於て自ら誓言せいごんを説け」とは、したゝかに仰せ下せしか。又諸大菩薩も「譬へば大風のどくじゆ小樹の枝を吹くが如し」等と、吉祥草きちじょうそうの大風に随ひ、河水の大海へ引くがごとく、仏には随ひまいらせしか。

而れども靈山りょうぜん日浅くして夢のごとく、うつゝならずありしに、証前の宝塔の上に起後の宝塔あって、十方の諸仏来集せる、皆我が分身ぶんじんなりとなのらせ給ひ、宝塔は虚空こくうに、釈迦・多宝座を並べ、日月の青天に並出びょうしゆつせるがごとし。人天大会は星をつらね、分身の諸仏は大地の上、宝樹もとの下床の師子のゆかにまします。華嚴經の蓮華藏世界は、十方此土の報仏、各々に国々にして、彼の界の仏、此の土に来たつて分身となのらず。此の界の仏、彼の界へゆかず。但、法慧等の大菩薩のみ互ひらいえに來會せり。大日經・金剛頂經等の八葉九尊・三十七尊等、大日如來の化身とはみゆれども、其の化身、三身円満の古仏にあらず。大品經の千仏、阿彌陀經の六方の諸仏、いまだ來集の仏にあらず。大集經の來集の仏、又分身ぶんじんならず。金光明經の四方の四仏は化身なり。總じて一切經の中に、各修各行の三身円満の諸仏を集めて、我が分身ぶんじんとはとかれず。これ壽量品の遠序おんじよなり。始成四十余年の釈尊、一劫十劫等、已前の諸仏を集めて分身ととかる。さすが平等意趣にもにず、をびたゞしくをどろかし、又始成の仏ならば、所化、十方に充滿すべからざれば、分身の徳は備はりたりとも示現してえ益きなし。天台云はく「分身既に多し。當に知るべし成仏久しきことを」等云云。大会のをどろきし心をかゝれたり。

其の上に地涌千界の大菩薩大地より出來せり。釈尊に第一の御弟子とをばしき普賢・文殊等もんじゆにもにるべくもなし。華嚴・方等・般若・法華經の宝塔品に來集せる大菩薩、大日經等の金剛薩埵等こんごうさだの十六の大菩薩なども、此の菩薩に對当すれば彌猴の群中に帝釈の來り給ふがごとし。山人やまがつに月卿等げつけいのまじわれるにことならず。補處ふじよの彌勒みろくすら猶迷惑せり。何に況んや其の已下をや。此の千世界の大菩薩の中に、四人の大聖いわゆるまします。所謂、上行・無邊行・淨行・安立行なり。此の四人は、虚空靈山こくうりょうぜんの諸大菩薩等、眼もあはせ心もをよばず。華嚴經の四菩薩、大日經の四菩薩、金剛頂經の十六大菩薩等も、此の菩薩に對すれば翳眼えいげんのものゝ日輪を見るがごとく、海人が皇帝あまに向かひ奉るがごとし。太公等の四聖の衆中にありしににたり。商山しこうの四皓けいていが惠帝に仕へしにことならず。巍巍堂々として尊高なり。釈迦・多宝・十方の分身を除いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし。彌勒菩薩、心に念言すらく、我は仏の太子の御時より三十成道、今の靈山りょうぜん

まで四十二年が間、此の界の菩薩・十方世界より来集せし諸大菩薩、皆しりたり。又十方の淨・穢土に或は御使ひ、或は我と遊戯して、其の国々に大菩薩を見聞せり。此の大菩薩の御師などは、いかなる仏にてやあるらん。よも此の釈迦・多宝・十方の分身の仏陀には、にるべくもなき仏にてこそをはすらめ。雨の猛きを見て竜の大なる事をしり、華の大なるを見て池のふかきことはしんぬべし。此等の大菩薩の来たる国、又誰と申す仏にあいたてまつり、いかなる大法をか習修し給ふらんと疑ひし、あまりの不審さに音をもいだすべくもなけれども、仏力にやありけん。弥勒菩薩疑って云はく「無量千万億の大衆の諸の菩薩は、昔より未だ曾て見ざる所なり。是の諸の大威徳の精進の菩薩衆は、誰か其の為に法を説いて教化して成就せる。誰に従ってか初めて発心し、何れの仏法をか称揚せる。世尊、我昔より来、未だ曾て是の事を見ず。願はくは其の所従の国土の名号を説きたまへ。我常に諸国に遊べども、未だ曾て是の事を見ず。我此の衆の中に於て、乃し一人をも識らず。忽然に地より出でたり。願はくは其の因縁を説きたまへ」等云云。天台云はく「寂場より已降、今座より已往、十方の大士来会絶えず。限るべからずと雖も我補処の智力を以て悉く見、悉く知る。而れども此の衆に於て一人をも識らず。然るに我十方に遊戯して諸仏に觀奉し大衆に快く識知せらる」等云云。妙楽云はく「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云。経釈の心分明なり。詮ずるところは初成道よりこのかた、此土十方にて此等の菩薩を見たてまつらず、きかずと申すなり。

仏、此の疑ひに答へて云はく「阿逸多、汝等昔より未だ見ざる所の者は、我是の娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得已はって、是の諸の菩薩を教化し示導し、その心を調伏して、道意を發こさしめたり」等。又云はく「我伽耶城菩提樹下に於て、坐して最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を轉じ、爾して乃ち之を教化して、初めて道心を發こさしむ。今皆不退に住せり。乃至、我久遠より来是等の衆を教化せり」等云云。

此に弥勒等の大菩薩、大いに疑ひをもう。華嚴經の時、法慧等の無量の大菩薩あつまる。いかなる人々なるらんとをもへば、我が善知識なりとをほせられしかば、さもやとうちをもひき。其の後の大宝坊、白鷺池等の来会の大菩薩も、しかのごとし。此の大菩薩は、彼等にはにるべくもなきふりたりげにまします。定めて釈尊の御師匠かなんどもをばしきを、「令初發道心」とて幼稚のものどもなりしを教化して弟子となせりなんどもをほせあれば大いなる疑ひなるべし。日本の聖徳太子は人王第三十二代用明天皇の御子なり。御年六歳の時、百濟・高麗・唐土より老人どものわたりたりしを、六歳の太子、我が弟子なりとをほせありしかば、彼の老人ども又合掌して我が師なり等云云。不思議なりし事なり。外典に申す、或者道をゆけば、路のほとりに年三十計りなるわかものが、八十計りなる老人をとらへて打ちけり。いかなる事ぞとてえは、此の老翁は我が子なりなど申すとかたるにもにたり。されば弥勒菩薩等疑って云はく「世尊、如来太子たり

し時、釈の宮を出でて伽耶城<sup>がやじょう</sup>を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是より已来<sup>このかた</sup>、始めて四十余年を過ぎたり。世尊<sup>いかん</sup>、云何ぞ此の少時に於て、大いに仏事を作したまへる」等云云。一切の菩薩、始め華嚴經より四十余年、会々に疑ひをまうけて、一切衆生の疑網をはらす中に、此の疑ひ第一の疑ひなるべし。無量義經の大莊嚴等の八万の大士、四十余年と今との歴劫・疾成<sup>りゃっこう しつじょう</sup>の疑ひにも超過せり。觀無量壽經に、韋提希夫人の子阿闍世王<sup>いだいけ ぶにん あじゃせおう</sup>、提婆にすかされて、父の王をいましめ母を殺さんとせしが、耆婆・月光にをどされて母をはなちたりし時、仏を請じたてまつて、まづ第一の問ひに云はく「我宿<sup>むかし</sup>何の罪ありて此の悪子を生む。世尊、復何等の因縁有って、提婆達多と共に眷属と為りたまふ」等云云。此の疑ひの中に「世尊復有何等因縁<sup>ぶう がとういんねん</sup>」等の疑ひは大なる大事なり。輪王は敵と共に生まれず。帝釈は鬼とともにならず。仏は無量劫の慈悲者なり。いかに大怨と共にはまします。還つて仏にはましまさざるかと疑ふなるべし。而れども仏答へ給わず。されば觀經を讀誦せん人、法華經の提婆品へ入らざればいたづらごととなるべし。大涅槃經に迦葉菩薩<sup>かしょう</sup>の三十六の問ひもこれには及ばず。されば仏此の疑ひを晴らさせ給はずば、一代の聖教は泡沫にどうじ、一切衆生は疑網にかゝるべし。壽量の一品の大切なるこれなり。

其の後、仏、壽量品を説いて云はく「一切世間の天人及び阿修羅<sup>あしゅら</sup>は皆、今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城<sup>がやじょう</sup>を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと謂へり」等云云。此の經文は、始め寂滅道場より、終はり法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたるなり。「然るに善男子、我実に成仏してより已来<sup>このかた</sup>、無量無辺、百千万億那由他劫なり」等云云。此の文は、華嚴經の三処の「始成正覺」、阿含經に云ふ「初成」、淨名經の「始坐仏樹」、大集經に云ふ「始十六年」、大日經の「我昔坐道場」、仁王經の「二十九年」、無量義經の「我先道場」、法華經の方便品に云ふ「我始坐道場」等を、一言に大虚妄<sup>こもつ</sup>なりとやぶるもんなり。

此の過去常顯はるゝ時、諸仏、皆釈尊の分身なり。爾前・迹門<sup>にぜん しゃくもん</sup>の時は、諸仏・釈尊に肩を並べて各修各行の仏なり。かるがゆへに諸仏を本尊とする者、釈尊等を下す。今、華嚴の台上・方等・般若・大日經等の諸仏、皆釈尊の眷属なり。仏三十成道の御時は、大梵天王・第六天等の知行の娑婆世界<sup>しゃば</sup>を奪ひ取り給ひき。今、爾前・迹門<sup>にぜん しゃくもん</sup>にして、十方を淨土とがうして、此の土を穢土<sup>えど</sup>ととかれしを打ちかへして、此の土は本土となり、十方の淨土は垂迹<sup>すいじゃく</sup>の穢土<sup>えど</sup>となる。

仏は久遠の仏なれば迹化他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり。一切經の中に此の壽量品ましまさずば、天に日月の無く、国に大王の無く、山河に珠の無く、人に神<sup>たましい</sup>のなからんがごとくしてあるべきを、華嚴・真言等の権宗の智者とをぼしき、澄觀・嘉祥・慈恩・弘法等の一往権宗の人々、且つは自らの依經を讚歎せんために、或は云はく「華嚴經の教主は報身、法華經は応身」と。或は云く「法華壽量品の仏は無明<sup>へんいき</sup>の辺域、大日

經の仏は明の分位」等云云。雲は月をかくし、讒臣は賢人をかくす。人讒せば黄石も玉とみへ、諛臣も賢人かとをばゆ。今、濁世の学者等、彼等の讒義に隠されて、寿量品の玉を断ばず。又、天台宗の人々もたほらかされて、金石一同のをもひをなせる人々もあり。仏久成にましまさずば、所化の少なかるべき事を弁ふべきなり。月は影を慳まざれども水なくばうつるべからず。仏衆生を化せんとをばせども結縁うすければ八相を現ぜず。例せば、諸の声聞が初地・初住にはのぼれども、爾前にして自調自度なりしかば、未来の八相をごするなるべし。しかれば教主釈尊始成ならば、今此の世界の梵・帝・日月・四天等は、劫初より此の土を領すれども、四十余年の仏弟子なり。靈山八年の法華結縁の衆、今まいりの主君にをもひつかず、久住の者にへだてらるゝがごとし。今、久遠実成あらわれぬれば、東方の薬師如来の日光・月光、西方阿弥陀如来の観音・勢至、乃至十方世界の諸仏の御弟子、大日・金剛頂等の両部、大日如来の御弟子の諸大菩薩、猶、教主釈尊の御弟子なり。諸仏、釈迦如来の分身たる上は、諸仏の所化申すにをよばず。何に況んや、此の土の劫初よりこのかたの日月・衆星等、教主釈尊の御弟子にあらずや。

而るを天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり。俱舎・成実・律宗は三十四心断結成道の釈尊を本尊とせり。天尊の太子、迷惑して我が身は民の子とをもうがごとし。華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗の宗なり。法相・三論は勝心身ににたる仏を本尊とす。天王の太子、我が父は侍とをもうがごとし。華嚴宗・真言宗は釈尊を下して盧舎那・大日等を本尊と定む。天子たる父を下して種姓もなき者の法王のごとくなるにつけり。浄土宗は、釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをもち、教主をすてたり。禅宗は、下賤の者一分の徳あって父母をさぐるがごとし。仏をさげ経を下す。此皆、本尊に迷へり。例せば、三皇已前に父をしらず、人皆禽獸に同ぜしがごとし。寿量品をしらざる諸宗の者は畜に同じ。不知恩の者なり。故に妙樂云はく「一代教の中未だ曾て父母の寿の遠きことを顯はさず。若し父の寿の遠きことを知らざれば、復父統の邦に迷ふ。徒に才能と謂ふも全く人の子に非ず」等云云。妙樂大師は唐の末、天宝年中の者なり。三論・華嚴・法相・真言等の諸宗、並びに依経を深くみ、広く勘へて、寿量品の仏をしらざる者は父統の邦に迷へる才能ある畜生とかけるなり。「徒謂才能」とは、華嚴宗の法蔵・澄観、乃至真言宗の善無畏三蔵等は才能の人師なれども子の父をしらざるがごとし。伝教大師は日本顕密の元祖、秀句に云はく「他宗所依の経は、一分仏母の義有りと雖も、然れども、但愛のみ有って敵の義を欠く。天台法華宗は敵愛の義を具す。一切の賢聖、学・無学及び菩薩心を発こす者の父なり」等云云。真言・華嚴等の経々には、種熟脱の三義、名字すら猶なし。何に況んや其の義をや。華嚴・真言経等の一生初地の即身成仏等は、経は権経にして過去をかくせり。種をしらざる脱なれば、超高が位にのぼり、道鏡が王位に居せんとせしがごとし。宗々互ひに種を争ふ。予此をあらそわず、但経に任すべし。法華経の種に依って天親菩薩は種子無上を立てたり。天台の一

念三千これなり。華嚴經乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子、皆一念三千なり。天台智者大師、一人此の法門を得給えり。華嚴宗の澄觀、此の義を盗んで華嚴經の「心如工画師」の文の神とす。真言・大日經等には二乗作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし。善無畏三蔵、震旦に來たつて後、天台の止觀を見て智發し、大日經の「心実相、我一切本初」の文の神に、天台の一念三千を盗み入れて真言宗の肝心として、其の上、印と真言とをかざり、法華經と大日經との勝劣を判ずる時、理同事勝の積をつくれり。兩界の曼荼羅の二乗作仏・十界互具は一定、大日經にありや。第一の誑惑なり。故に、伝教大師云はく「新來の真言家は則ち筆受の相承を泯し、旧到の華嚴家は則ち影響の軌模を隠す」等云云。俘囚の嶋などにわたつて、ほのぼのといううたは、われよみたりなど申せば、えぞでいの者はさこそとをもうべし。漢土・日本の学者、又かくのごとし。良諲和尚云く「真言・禪門・華嚴・三論、乃至若し法華等に望めば是接引門」等云云。善無畏三蔵の閻魔の責めにあづからせ給ひしは此の邪見による。後に心をひるがへし法華經に歸伏してこそ、このせめをば脱れさせ給ひしか。其の後、善無畏・不空等、法華經を兩界の中央にをきて大王のごとくし、胎蔵の大日經・金剛頂經をば左右の臣下のごとくせしこれなり。日本の弘法も、教相の時は華嚴宗に心をよせて、法華經をば第八にをきしかども、事相の時、実慧・真雅・円澄・光定等の人々に伝へ給ひし時、兩界の中央に上のごとくをかれたり。例せば、三論の嘉祥は法華玄十卷に、法華經を第四時「会二破二」と定むれども、天台に歸伏して七年つかへ、「廢講散衆、身為肉橋」となせり。法相の慈恩は法苑林七卷十二卷に「一乘方便・三乘真実」等の妄言多し。しかれども玄賛の第四には「故亦兩存」等と我が宗を不定になせり。言は兩方なれども心は天台に歸伏せり。華嚴の澄觀は華嚴の疏を造りて、華嚴・法華相對して、法華を方便とかけるに似たれども「彼の宗、之れを以て実と為す、此の宗の立義理通ぜざること無し」等とかけるは悔い還すにあらずや。弘法も又かくのごとし。龜鏡なければ我が面をみず。敵なければ我が非をしらず。真言等の諸宗の学者等、我が非をしらざりし程に、伝教大師にあひたてまつて自宗の失をしるなるべし。

されば諸經の諸仏・菩薩・人天等は、彼々の經々にして仏にならせ給ふやうなれども、實には法華經にして正覺なり給へり。釈迦・諸仏の衆生無辺の總願は皆此の經にをいて満足す。今者已満足の文これなり。予、事の由ををし計るに、華嚴・觀經・大日經等をよみ修行する人をば、その經々の仏・菩薩・天等守護し給ふらん。疑ひあるべからず。但し大日經・觀經等をよむ行者等、法華經の行者に敵対をなさば、彼の行者をすて法華經の行者を守護すべし。例せば、孝子、慈父の王敵となれば、父をすて王にまいる。孝の至りなり。仏法も又かくのごとし。法華經の諸仏・菩薩・十羅刹、日蓮を守護し給ふ上、浄土宗の六方の諸仏、二十五の菩薩、真言宗の千二百等、七宗の諸尊、守護の善神、日蓮を守護し給ふべし。例せば、七宗の守護神、伝教大師をまぼり給ひしがごとし

とをもふ。

日蓮案じて云はく、法華經の二処三會の座にましまし、日月等の諸天は、法華經の行者出来せば、磁石の鉄を吸ふがごとく、月の水に遷るがごとく、須臾に来たつて行者に代はり、仏前の御誓ひをはたさせ給ふべしとこそをばへ候に、いま、で日蓮をとぶらひ給わぬは、日蓮法華經の行者にあらざるか。されば重ねて經文を勘へて我が身にあて、身の失をしるべし。

疑つて云はく、当世の念仏宗・禅宗等をば、何なる智眼をもつて法華經の敵人、一切衆生の悪知識とはしるべきや。答へて云はく、私の言を出だすべからず。經釈の明鏡を出だして謗法の醜面をうかべ、其の失をみせしめん。生盲は力をよばず。法華經の第四宝塔品に云はく「爾の時に多宝仏、宝塔の中に於て半座を分かち、釈迦牟尼仏に与ふ爾の時に大衆、二如来の七宝の塔中の師子の座の上に在して、結跏趺坐したまふを見たてまつる大音声を以て普く四衆に告げたまはく、誰か能く此の娑婆国土に於て、広く妙法華經を説かん。今正しく是時なり。如来久しからずして当に涅槃に入るべし。仏、此の妙法華經を以て、付囑して在ること有らしめんと欲す」等云云。第一の勅宣なり。又云はく「爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、聖主世尊久しく滅度したまふと雖も、宝塔の中に在して、尚、法の為に来たりたまへり。諸人云何ぞ勤めて法の為にせざらん。又我が分身、無量の諸仏、恒沙等の如く来たれるは、法を聴かんと欲す。各妙なる土、及び弟子衆・天人・竜神、諸の供養の事を捨て、法をして久しく住せしめんが故に、此に来至したまへり。譬へば、大風の小樹の枝を吹くが如し。是の方便を以て、法をして久しく住せしむ。諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に、誰か能く此の經を護持し読誦せん。今、仏前に於て自ら誓言を説け」と。第二の鳳詔なり。「多宝如来、及び我が身、集むる所の化仏、當に此の意を知るべし。諸の善男子、各諦かに思惟せよ。此は為れ難事なり。宜しく大願を發こすべし。諸余の經典、数恒沙の如し。此等を説くと雖も、未だ難しと為すに足らず。若し須弥を接つて他方の無数の仏土に擲げ置かんも、亦未だ難しと為す。若し仏の滅後に、悪世の中に於て能く此の經を説かん、是れ則ち難しとす。仮使劫焼に、乾ける草を担ひ負つて、中に入れて焼けざらんも、亦未だ難しと為す。我が滅度の後に、若し此の經を持ちて、一人の為にも説かん、是れ則ち難しとす。諸の善男子、我が滅後に於て、誰か能く、此の經を護持し読誦せん、今仏前に於て自ら誓言を説け」等云云。第三の諫勅なり。第四、第五の二箇の諫曉、提婆品にあり、下にかくべし。

此の經文の心は眼前なり。青天に大日輪の懸かれるがごとし。白面に靨のあるにたり。而れども生盲の者と、邪眼の者と、一眼のものと、各謂自師の者、辺執家の者はみがたし。万難をすて、道心あらん者にしるしとゞめてみせん。西王母がそのも、輪王出世の優曇華よりもあいがたく、沛公が項羽と八年漢土をあらそひし、頼朝と宗盛

が七年秋津島にたゝかひし、修羅と帝釈と、金翅鳥と竜王と阿耨池に争へるも、此にはすぐべからずとしるべし。日本国に此の法頭はるゝこと二度なり。伝教大師と日蓮となりとしれ。無眼のものは疑ふべし、力及ぶべからず。此の経文は日本・漢土・月氏・竜宮・天上・十方世界の一切経の勝劣を、釈迦・多宝・十方の仏、来集して定め給ふなるべし。

問うて云はく、華嚴經・方等經・般若經・深密經・楞伽經・大日經・涅槃經等は、九易の内か六難の内か。答へて云はく、華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄観等の三蔵大師読んで云はく「華嚴經と法華經と六難の内、名は二經なれども、所説乃至理これ同じ。四門観別、見真諦同のごとし」と。法相の玄奘三蔵・慈恩大師等読んで云はく「深密經と法華經とは同じく唯識の法門にして第三時の教、六難の内なり」と。三論の吉蔵等読んで云はく「般若經と法華經とは名異体同、二經一法なり」と。善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等読んで云はく「大日經と法華經とは理同、をなじく六難の内の經なり」と。日本の弘法読んで云はく「大日經は六難九易の内にあらず。大日經は釈迦所説の一切経の外、法身大日如来の所説なり」と。又或人云はく「華嚴經は報身如来の所説、六難九易の内にはあらず」と。此の四宗の元祖等かやうに読みければ、其の流れをくむ数千の学徒等も、又此の見をいはず。日蓮なげいて云はく、上の諸人の義を左右なく非なりといわば、当世の諸人面を向くべからず。非に非をかさね、結句は国王に讒奏して命に及ぶべし。但し我等が慈父、雙林最後の御遺言に云はく「法に依って人に依らざれ」等云云。不依人等とは、初依・二依・三依・第四依。普賢・文殊等の等覺の菩薩、法門を説き給ふとも經を手ににぎらざらんをば用ゆべからず。「了義經に依って不了義經に依らざれ」と定めて、經の中にも了義・不了義經を糾明して信受すべきこそ候ひぬれ。竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云はく「修多羅に依らざるは黒論なり、修多羅に依るは白論なり」等云云。天台大師云はく「修多羅と合ふ者は録して之を用ひ、文無く義無きは信受すべからず」等云云。伝教大師云はく「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」等云云。円珍智証大師云はく「文に依って伝ふべし」等云云。上にあぐるところの諸師の釈、皆一分一分、經論に依って勝劣を弁ふやうなれども、皆、自宗を堅く信受し、先師の謬義をたゞさゞるゆへに曲会私情の勝劣なり。莊嚴己義の法門なり。仏滅後の犢子・方広、後漢已後の外典は、仏法外の外道の見よりも、三皇五帝の儒書よりも、邪見強盛なり、邪法巧みなり。華嚴・法相・真言等の入師、天台宗の正義を嫉むゆへに、実經の文を会して権義に順ぜしむること強盛なり。しかれども道心あらん人、偏党をすて自他宗をあらそわず人をあなづる事なかれ。

法華經に云はく「已今当」等云云。妙樂云はく「縦ひ經有って諸經の王と云ふとも、已今当説最為第一と云はず」等云云。又云はく「已今当の妙、茲に於て固く迷ふ。謗法の罪苦長劫に流る」等云云。此の經釈におどろいて、一切經並びに入師の疏釈を見るに、

狐疑の氷とけぬ。今真言の愚者等、印・真言のあるをたのみて、真言宗は法華經にすぐれたりとをもひ、慈覺大師等の真言勝れたりとをほせられぬれば、なんどもへるはいうにかいなき事なり。

密嚴經に云はく「十地華嚴等、大樹と神通・勝鬘及び余經と、皆此の經より出でたり。是くの如きの密嚴經は、一切經の中に勝れたり」等云云。大雲經に云はく「是の經は即ち是諸經の轉輪聖王なり。何を以ての故に。是の經典の中に衆生の実性、仏性常住の法蔵を宣説する故なり」等云云。六波羅蜜經に云はく「所謂、過去無量の諸仏所説の正法、及び我今説く所の所謂八万四千の諸の妙法蘊なり、撰して五分と為す。一には素咀纜、二には毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜、五には陀羅尼門。此の五種の蔵をもつて有情を教化す。若し彼の有情、契經・調伏・対法・般若を受持すること能はず。或は復有情、諸の悪業四重・八重・五無間罪・方等經を謗する一闍提等の種々の重罪を造るに、銷滅して速疾に解脱し、頓に涅槃を悟ることを得せしめ、而も彼が為に諸の陀羅尼蔵を説く。此の五の法蔵は、譬へば乳・酪・生蘇・熟蘇・及び妙なる醍醐の如し。總持門とは譬へば醍醐の如し。醍醐の味は乳・酪・蘇の中に微妙第一にして能く諸の病を除き、諸の有情をして身心安樂ならしむ。總持門とは契經等の中に最も第一と為す。能く重罪を除く」等云云。解深密經に云はく「爾の時に勝義生菩薩、復仏に白して言さく、世尊、初め一時に於て、波羅痾斯・仙人墮処・施鹿林の中に在して、唯声聞乘を發趣せん者の為に四諦の相を以て正法輪を轉じたまひき。是甚だ奇にして、甚だ希有と為すと。一切世間の諸の天人等、先より能く法の如く轉ずる者有ること無しと雖も、而も彼の時に於て轉じたまふ所の法輪は、有上なり有容なり、是未了義なり、是諸の諍論安足の処所なり。世尊、在昔第二時の中に、唯發趣して大乘を修する者の為に、一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂靜にして、自性涅槃なるに依り、隱密の相を以て正法輪を轉じたまひき。更に甚だ奇にして、甚だこれ希有なりと雖も、而も彼の時に於て轉じたまふ所の法輪、亦是有上なり、容受する所有り。猶未了義ならず、是諸の諍論安足の処所なり。世尊、今第三時の中に於て、普く一切乘を發趣する者の為に、一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂靜・自性涅槃にして・無自性の性なるに依り、顯了の相を以て正法輪を轉じたまふ。第一甚だ奇にして、最も希有と為すと。今に、世尊轉じたまふ所の法輪は無上無容にして是真の了義なり。諸の諍論安足の処所に非ず」等云云。大般若經に云はく「聽聞する所の世・出世の法に随つて、皆能く方便して般若甚深の理趣に會入し、諸の造作する所の世間の事業も亦般若を以て法性に會入し、一事として法性を出づる者を見ず」等云云。大日經第一に云はく「秘密主、大乘行あり、無緣乘の心を發こす。法に我性無し。何を以ての故に。彼の往昔是くの如く修行せし者の如く、蘊の阿頼耶を觀察して自性幻の如しと知る」等云云。又云はく「秘密主、彼是くの如く無我を捨て、心主自在にして自心の本不生を覺す」等云

云。又云はく「所謂、空性は根境を離れ、無相にして境界無く、諸の戲論に越えて虚空に等同なり。乃至、極無自性」等云云。又云はく「大日尊、秘密主に告げて言はく、秘密主、云何なるか菩提。謂はく実の如く自心を知る」等云云。華嚴經に云はく「一切世界の諸の群生、声聞道を求めんと欲すること有ること尠し。縁覚を求むる者転復少なし。大乘を求むる者甚だ希有なり。大乘を求むる者、猶易しと為し、能く是の法を信ずること甚だ難しと為す。況んや能く受持し、正憶念し、説の如く修行し、眞実に解せんをや。若し三千大千界を以て頂戴すること一劫、身動ぜざらんも彼の所作未だ難しと為す。是の法を信ずる者を甚だ難しと為す。大千塵数の衆生の類に、一劫、諸の樂具を供養するも、彼の功德未だ勝ると為す。是の法を信ずる者を殊勝と為す。若し掌を以て十仏刹を持し、虚空の中に於て住すること一劫なるも、彼の所作未だ難しと為す。是の法を信ずる者を甚だ難しと為す。十仏刹塵の衆生の類に、一劫、諸の樂具を供養せんも、彼の功德未だ勝れりと為さず。是の法を信ずる者を殊勝と為す。十仏刹塵数の諸の如来を、一劫、恭敬して供養せん。若し、能く此の品を受持せん者の功德、彼於も最勝と為す」等云云。涅槃經に云はく「是の諸の大乗方等經典、復無量の功德を成就すと雖も、是の經に比んと欲するに、喩へを為すを得ざること、百倍・千倍・百千万億・乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。善男子、譬へば牛より乳を出だし、乳より酪を出だし、酪より生蘇を出だし、生蘇より熟蘇を出だし、熟蘇より醍醐を出だす。醍醐は最上なり。若し服すること有る者は衆病皆除き、所有の諸薬も悉く其の中に入るが如し。善男子、仏も亦是くの如し。仏より十二部經を出だし、十二部經より修多羅を出だし、修多羅より方等經を出だし、方等經より般若波羅蜜を出だし、般若波羅蜜より大涅槃を出だす。猶醍醐の如し。醍醐と言ふは仏性に喩ふ」等云云。

此等の經文を法華經の已今当、六難九易に相對すれば、月に星をならべ、九山に須弥を合はせたるににたり。しかれども華嚴宗の澄觀、法相・三論・真言等の慈恩・嘉祥・弘法等の仏眼のごとくなる人、猶此の文にまどへり。何に況んや盲眼のごとくなる当世の學者等、勝劣を弁ふべしや。黑白のごとくあきらかに、須弥、芥子のごとくなる勝劣なをまどへり。いはんや虚空のごとくなる理に迷はざるべしや。教の浅深をしらざれば理の浅深弁ふものなし。卷をへだて文前後すれば、教門の色弁へがたければ、文を出だして愚者を扶けんとをもう。王に小王・大王、一切に少分・全分、五乳に全喩・分喩を弁ふべし。六波羅蜜經は有情の成仏あって、無性の成仏なし。何に況んや久遠実成をあかさず。猶涅槃經の五味にをよばず、何に況んや法華經の迹門本門にたいすべしや。而るに日本の弘法大師、此の經文にまどひ給ひて、法華經を第四の熟蘇味に入れ給へり。第五の總持門の醍醐味すら涅槃經に及ばず、いかにし給ひけるやらん。而るを「震旦の人師争つて醍醐を盗む」と、天台等を盗人とかき給へり。「惜しいかな古賢醍醐を嘗めず」等と自歎せられたり。

此等はさてをく。我が一門の者のためにしるす。他人は信ぜざれば逆縁なるべし。一涕いっていをなめて大海潮のしををしり、一華渡を見て春を推せよ。万里をわたって宋に入らずとも、三箇年を経て靈山にいたらずとも、竜樹のごとく竜宮に入らずとも、無著菩薩むじゃくのごとく弥勒菩薩みるくにあはずとも、二処三會さんねに値はずとも、一代の勝劣はこれをしれるなるべし。蛇は七日が内の洪水こうずいをしる、竜の眷属なるゆへ。鳥は年中の吉凶をしれり、過去おんようじに陰陽師なりしゆへ。鳥は飛ぶ徳、人にすぐれたり。日蓮は諸經の勝劣をしること、華嚴の澄觀、三論の嘉祥かじょう、法相の慈恩、真言の弘法にすぐれたり。天台・伝教の跡をしのぶゆへなり。彼の人々は天台・伝教に帰せさせ給はずは、謗法の矢とが、脱れさせ給ふべしや。当世、日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華經にたてまつる。名をば後代とどに留むべし。大海の主となれば、諸の河神皆したがう。須弥山の王に諸の山神したがわざるべしや。法華經の六難九易を弁わきまふれば一切經よまざるにしたがうべし。

宝塔品の三箇の勅宣の上に、提婆品に二箇の諫曉かんぎょうあり。提婆達多いっせんだいは一闡提なり、天王如来と記せらる。涅槃經四十卷の現証は此の品にあり。善星ぜんしやう・阿闍世あじゃせ等の無量の五逆謗法の者、一をあげ頭をあげ、万ををさめ枝をしたがふ。一切の五逆・七逆・謗法・闡提、天王如来にあらはれ了んぬ。毒藥かんろ変じて甘露となる。衆味にすぐれたり。竜女が成仏、此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華經已前の諸の小乗經には、女人の成仏をゆるさず。諸の大乗經には、成仏往生をゆるすやうなれども、或は改転の成仏にして、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。拳一例諸こいちれいしよと申し、竜女が成仏は、末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。儒家の孝養は今生にかぎる。未来の父母たすを扶けざれば、外家の聖賢は有名無実なり。外道は過未をしれども父母を扶くる道なし。仏道こそ父母の後世を扶くれば聖賢の名はあるべけれ。しかれども法華經已前等の大小乗の經宗は、自身の得道なほ猶かなひがたし。何に況んや父母をや。但文のみあつて義なし。今、法華經の時こそ、女人成仏の時、悲母の成仏も顕はれ、達多の悪人成仏の時、慈父の成仏も顕はるれ。此の經は内典の孝經なり。二箇のいさめ了んぬ。

已上五箇の鳳詔ほうしやうにをどろきて勸持品の弘經あり。明鏡の經文を出だして、当世の禅・律・念佛者、並びに諸檀那の謗法をしらしめん。日蓮といふし者は、去年九月十二日子丑ねうしの時に頸はねられぬ。此は魂魄佐土の国にいたりて、返る年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みん人、いかに怖をぢぬらむ。此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国、当世をうつし給ふ明鏡なり。かたみともみるべし。

勸持品に云はく「唯願うらおもはくは慮ひしたまふべからず。仏滅度の後、恐怖悪世の中に於て、我等当に広く説くべし。諸の無智の人の、悪口罵詈あつくめり等し、及び刀杖を加ふる者有らん、我等皆当に忍ぶべし。悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲てんごくに、未だ得ざるを為

れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に、納衣にして空閑に在って、自ら眞の道を行ずと謂ひて、人間を輕賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣の与に法を説いて、世に恭敬せらるゝことを為ること六通の羅漢の如くならん。是の人悪心を懐き、常に世俗の事を念ひ、名を阿練若に仮りて、好んで我等が過を出ださん。常に大衆の中に在って我等を毀らんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士、及び余の比丘衆に向かつて、誹謗して我が悪を説いて、是邪見の人、外道の論議を説くと謂はん。濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼其の身に入って、我を罵詈毀辱せん。濁世の悪比丘は、仏の方便隨宜所説の法を知らず、悪口して鬻聲し、数々擯出せられん」等云云。記の八に云はく「文に三、初めに一行は通じて邪人を明かす。即ち俗衆なり。次の一行は道門増上慢の者を明かす。三に七行は僭聖増上慢の者を明かす。此の三の中に、初めは忍ぶべし。次は前に過ぎたり。第三最も甚だし。後々の者は轉識り難きを以ての故に」等云云。東春に智度法師云はく「初めに有諸より下の五行は第一の一偈は三業の悪を忍ぶ、是外悪の人なり。次に悪世の下の一偈は、是上慢出家の人なり。第三に或有阿練若より下の三偈は、即ち是出家の処に一切の悪人を損す」等云云。又云はく「常在大衆より下の兩行は、公処に向かつて法を毀り人を謗す」等云云。涅槃經の九に云はく「善男子、一闍提有り。羅漢の像を作して空処に住し、方等大乘經典を誹謗せん。諸の凡夫人見已はって、皆眞の阿羅漢、是大菩薩なりと謂はん」等云云。又云はく「爾の時に是の經、閻浮提に於て當に広く流布すべし。是の時に、當に諸の悪比丘有って、是の經を抄略し、分かつて多分と作し、能く正法の色香美味を滅すべし。是の諸の悪人、復是くの如き經典を読誦すと雖も、如来の深密の要義を滅除して、世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す。前を抄して後に著け後を抄して前に著け、前後を中に著け中を前後に著く。當に知るべし、是くの如きの諸の悪比丘は、是れ魔の伴侶なり」等云云。六卷の般泥洹經に云はく「阿羅漢に似たる一闍提有って悪業を行ず。一闍提に似たる阿羅漢あって慈心を作さん。羅漢に似たる一闍提有りとは、是の諸の衆生、方等を誹謗するなり。一闍提に似たる阿羅漢とは、聲聞を毀訾し広く方等を説くなり。衆生に語って言はく、我汝等と俱に是菩薩なり。所以は何。一切皆如来の性有る故に。然も彼の衆生一闍提なりと謂はん」等云云。涅槃經に云はく「我涅槃の後、乃至、正法滅して後、像法の中に於て當に比丘有るべし。持律に似像して少かに經を読誦し、飲食を貪嗜し其の身を長養す。袈裟を服すと雖も、猶獵師の細視徐行するが如く、猫の鼠を伺ふが如し。常に是の言を唱へん。我羅漢を得たりと。外には賢善を現はし、内には貪嫉を懐く。啞法を受けたる婆羅門等の如し。實に沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云。

夫鷲峰・雙林の日月、毘藍・東春の明鏡に、当世の諸宗並びに国中の禪・律・念佛者が醜面を浮べたるに一分もくもりなし。妙法華經に云はく「於仏滅度後恐怖悪世中」と。

安樂行品に云はく「於後悪世」と。又云はく「於末世中」と。又云はく「於後末世法欲滅時」と。分別功德品に云はく「悪世末法時」と。薬王品に云はく「後五百歳」等云云。正法華經の勸説品に云はく「滅後末世」と。又云はく「然後来末世」等云云。添品法華經に云はく等。天台の云はく「像法の中の南三北七は、法華經の怨敵なり」と。伝教の云はく「像法の末、南都六宗の学者は、法華の怨敵なり」等云云。彼等の時はいまだ分明ならず。此は教主釈尊・多宝仏、宝塔の中に日月の並ぶがごとく、十方分身の諸仏、樹下に星を列ねたりし中にして、正法一千年、像法一千年、二千年過ぎて末法の始めに、法華經の怨敵三類あるべしと、八十万億那由他の諸菩薩の定め給ひし、虚妄となるべしや。当世は如来滅後二千二百余年なり。大地は指さばはづるとも、春は花はさかずとも、三類の敵人必ず日本国にあるべし。さるにては、たれたれの人々か三類の内なるらん。又誰人か法華經の行者なりとさゝれたるらん。をぼつかなし。彼の三類の怨敵に、我等入りてやあるらん。又法華經の行者の内にてやあるらん。をぼつかなし。周の第四昭王の御宇、二十四年甲寅四月八日の夜中に、天に五色の光氣南北に亘って昼のごとし。大地六種に震動し、雨ふらずして江河井池の水まさり、一切の草木に花さき菓なりたりけり。不思議なりし事なり。昭王大いに驚く。大史蘇由占って云はく、西方に聖人生まれたりと。昭王問うて云はく、此の国いかんと。答へて云はく、事なし。一千年の後、彼の聖言、此の国にわたって衆生を利すべしと。彼のわづかの外典の一毫未断見思の者、しかれども一千年のことをしる。はたして仏教一千一十五年と申せし、後漢の第二明帝の永平十年丁卯の年、仏法漢土にわたる。此は似るべくもなき、釈迦・多宝・十方分身の仏の御前の諸菩薩の未来記なり。当世日本国に、三類の法華經の敵人なかるべしや。されば仏、付法蔵經等に記して云はく「我が滅後に正法一千年が間、我が正法を弘むべき人、二十四人次第に相續すべし」と。迦葉・阿難等はさてをきぬ。五百年の脇比丘、六百年の馬鳴、七百年の竜樹菩薩等一分もたがわず、すでに出で給ひぬ。此の事いかにむなしかるべき。此の事相違せば一經皆相違すべし。所謂、舍利弗が未来の華光如来、迦葉の光明如来も皆妄説となるべし。爾前返って一定となつて、永不成仏の諸声聞なり。犬野干をば供養すとも、阿難等をば供養すべからずとなん。いかにせんいかにせん。

第一の有諸無智人と云ふは、經文の第二の悪世中比丘と第三の納衣の比丘の大檀那等と見へたり。随つて妙楽大師は「俗衆」等云云。東春に云はく「公処に向かふ」等云云。第二の法華經の怨敵は、經に云はく「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん」等云云。涅槃經に云はく「是の時に當に諸の悪比丘有るべし。乃至、是の諸の悪人、復是くの如き經典を讀誦すと雖も、如来深密の要義を滅除せん」等云云。止観に云はく「若し信無きは高く聖境に推して己が智分に非ずとす。若し智無きは増上慢を起こして、己れ仏に均しと謂ふ」等云云。道綽禪師が

云はく「二に理深解微なるに由る」等云云。法然云はく「諸行は機に非ず、時を失ふ」等云云。記の十に云はく「恐くは人謬り解せん者、初心の功德の大なることを識らずして、功を上位に推り、此の初心を蔑ろにせん。故に今、彼の行浅く功深きことを示して、以て経力を顕はず」等云云。伝教大師云はく「正像稍過ぎ已はって、末法太だ近きに有り。法華一乗の機、今正しく是其の時なり。何を以て知ることを得る。安樂行品に云はく末世法滅の時なり」等云云。慧心の云はく「日本一州円機純一なり」等云云。道綽と伝教と法然と慧心と、いづれ此を信ずべしや。彼は一切経に証文なし。此は正しく法華経によれり。其の上日本国一同に、叡山の大師は受戒の師なり。何ぞ天魔のつける法然に心をよせ、我が剃頭の師をなげつつるや。法然智者ならば何ぞ此の釈を選択に載せて和会せざる。人の理をかくせる者なり。第二の悪世中比丘と指さるゝは、法然等の無戒邪見の者なり。涅槃経に云はく「我等悉く邪見の人と名づく」等云云。妙楽云はく「自ら三教を指して皆邪見と名づく」等云云。止観に云はく「大経に云はく、此れよりの前は、我等皆邪見の人と名づくるなり。邪、豈悪に非ずや」等云云。弘決に云はく「邪は即ち是れ悪なり。是の故に当に知るべし、唯円を善と為す。復二意有り。一には順を以て善と為し、背を以て悪と為す。相待の意なり。著するを以て悪と為し、達するを以て善と為す。相待・絶待俱に須く悪を離るべし。円に著する尚悪なり、況んや復余をや」等云云。外道の善悪は、小乗経に対すれば皆悪道、小乗の善道乃至四味三経は、法華経に対すれば皆邪悪、但法華のみ正善なり。爾前の円は相待妙・絶待妙に対すれば猶悪なり。前三教に摂すれば猶悪道なり。爾前のごとく彼の経の極理を行ずる猶悪道なり。況んや観経等の猶華嚴・般若経等に及ばざる小法を本として、法華経を観経に取り入れて、還って念仏に対して閣拋閉捨せるは、法然並びに所化の弟子等、檀那等は、誹謗正法の者にあらずや。釈迦・多宝・十方の諸仏は「法をして久しく住せしめんが故に、此に来至したまへり」と。法然並びに日本国の念仏者等は、法華経は末法に念仏より前に滅尽すべしと、豈三聖の怨敵にあらずや。

第三は法華経に云はく「或は阿練若に有り、納衣にして空閑に在って、乃至、白衣の与に法を説いて、世に恭敬せらるゝことを為ること、六通の羅漢の如くならん」等云云。六巻の般泥洹経に云はく「羅漢に似たる一闍提有って悪業を行じ、一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん。羅漢に似たる一闍提有りと、是諸の衆生の方等を誹謗するなり。一闍提に似たる阿羅漢とは、声聞を毀訾して広く方等を説き、衆生に語って言はく、我汝等と俱に是菩薩なり。所以は何。一切皆如来の性有るが故に。然も彼の衆生は一闍提と謂はん」等云云。涅槃経に云はく「我涅槃の後 像法の中に於て当に比丘有るべし。持律に似像して少かに經典を誦し、飲食を貪嗜して其の身を長養す。袈裟を服すと雖も、猶獵師の細視徐行するが如く、猫の鼠を伺ふが如し。常に是の言を唱へん、我羅漢を得たりと 外には賢善を現はし、内には貪嫉を懐く。啞法を受けたる婆羅

門等の如し。實には沙門に非ずして沙門の像かたちを現じ、邪見熾盛しじょうにして正法を誹謗せん」等云云。妙樂云はく「第三最も甚だし。後々の者はうたた転識り難きを以ての故に」等云云。東春云はく「第三にわくう あれんにや或有阿練若より下の三偈は、即ち是出家の処に一切の悪人しやうを撰す」等云云。東春に「即是出家処撰一切悪人」等とは、当世日本国には何れの処ぞや。叡山えいざんか園城おんじやうか東寺か南都か、建仁寺か寿福寺か建長寺か、よくよくたづぬべし。延暦寺えんりやくの出家の頭かしらに、甲冑かちゆうをよろうをさすべきか。園城寺の五分法身はだえ がいじやうの膚に鎧杖えんりやくを帯せるか。彼等は經文に「納衣のう えざいくげん在空閑」と指すにはにず。「為世所恭敬い せ しょ く ぎやう によろく つう ら かん如六通羅漢」と人をもはず。又「てんなんしき こ転難識故」というべしや。華洛からくには聖一等、鎌倉かまくらには良觀等らうくわん とうににたり。人をあだむことなかれ。眼あらば經文に我が身をあわせよ。止觀の第一に云はく「止觀の明静みょうじやうなることは前代未だ聞かず」等云云。弘の一に云はく「漢の明帝夜夢みしより陳朝ちん ちやうに泊およぶまで、禅門に預かりまじわ廁え はつりて衣鉢ふ伝授する者」等云云。補注に云はく「衣鉢ふ伝授とは達磨だるまを指す」等云云。止の五に云はく「又一種の禅人、乃至、盲跛もう は し と ふたりの師徒、二俱に墮落す」等云云。止の七に云はく「九の意、世間の文字の法師ぜん じと共ならず、亦事相ぜん じの禅師と共ならず。一種の禅師は唯觀心の一意のみ有り。或は浅く或は偽る。余の九は全く無し。此虚言に非ず。後賢眼有らん者は当に証知すべきなり」と。弘の七に云はく「文字の法師とは、内かん げに觀解くわん げ無くして唯法相を構ふ。事相の禅師とは、境智なら び ぎやくを閑はず鼻膈び ぎやくに心を止む。乃至根本有漏う る じやう定等なり。一師唯觀心の一意のみ有る等とは、此はしばら且く与へて論を為す。奪ときふ則かん げんば、觀解くわん げ俱かに欠く。世間の禅人ひとえ偏とうとに理觀り かんを尚そらぶ、既に教を諳そらんぜず。觀を以て經を消し、八邪・八風を数へて丈六の仏と為し、五陰三毒を合はして名づけて八邪と為し、六入を用ひて六通と為し、四大を以て四諦と為す。此くの如く經をげ解するは、いつわ偽りの中の偽りなり。何ぞ浅く論ずべけんや」等云云。止觀の七に云はく「昔鄴洛ぎやうらくの禅師、名は河海しに播ときき、住する則ときんば四方雲のごとくに仰ぎ、去る則ときんば阡陌せん びやく群を成し、いんいんごうごう隱々轟々として亦何の利益り やくか有る。臨終に皆悔ぎやうらくゆ」等云云。弘の七に云はく「鄴洛ぎやうらくの禅師とは、鄴は相州に在り。即ち齊魏の都する所なり。大いに仏法を興す。禅祖のはじめ一なり。其の地を王化す。時人の意を護って其の名を出ださず。洛は即ち洛陽なり」等云云。六卷の般泥洹はつ ない おん經に云はく「究竟く きやうの処を見ずとは、彼の一闡提いっせんたいの輩ともがらの究竟の悪業を見ざるなり」等云云。妙樂云はく「第三最も甚だしうたたし轉識り難きが故に」等。無眼の者・一眼の者・邪見の者は、末法の始めの三類を見るべからず。一分の仏眼を得るもの此をしるべし。「向国王大臣ばらもん こじ婆羅門居士」等云云。東春に云はく「公処そしに向かひ法そしを毀り人を誘そしる」等云云。夫昔像法それの末こ みやうには護命ご みやう・修円等、奏状ざん ざうをさくげて伝教ぜん ざう大師を讒ざん奏す。今末法の始めには良觀ねん あ・念阿等、偽書を注して將軍家にさくぐ。あに三類の怨敵にあらくずや。

当世の念仏者等、天台法華宗の檀那の、国王・大臣・婆羅門・居士等に向かつて云はく、法華經り じんは理深我等げ みは解微、法は至って深く機至って浅し等と申しうとむるは、高推こう すい

しやうきやう ひ こ ち ぶん  
聖境、非己智分の者にあらずや。禅宗の云はく、法華経は月をさす指、禅宗は月なり。  
月をえて指なにかせん。禅は仏の心、法華経は仏の言なり。仏、法華経等の一切経を  
とかせ給ひて後、最後に一ふさの華をもって迦葉一人にさづく。其のしるしに仏の御  
袈裟を迦葉に付嘱し、乃至、付法蔵の二十八・六祖までに伝ふ等云云。此等の大妄語、  
國中を誑酔せしめてとしひさし。又天台・真言の高僧等、名は其の家にえたれども、  
我が宗にくらし。貪欲は深く、公家・武家ををそれて此の義を証伏し讚歎す。昔の多宝  
・分身の諸仏は、法華経の令法久住を証明す。今天台宗の碩徳は理深解微を証伏せり。  
かるがゆへに日本国に、但法華経の名のみあって得道の人一人もなし。誰をか法華経の  
行者とせん。寺塔を焼いて流罪せらるゝ僧侶はかずをしらず。公家・武家に諛ひて、  
にくまるゝ高僧これ多し。此等を法華経の行者というべきか。

仏語むなしからざれば三類の怨敵すでに国中に充滿せり。金言のやぶるべきかのゆへ  
に法華経の行者なし。いかんがせんいかんがせん。抑、たれやの人か衆俗に悪口罵詈  
せらるゝ。誰の僧か刀杖を加へらるゝ。誰の僧をか法華経のゆへに公家・武家に奏する。  
誰の僧か数々見擯出と度々ながさるゝ。日蓮より外に日本国に取り出ださんとするに人  
なし。日蓮は法華経の行者にあらず、天これをすて給ふゆへに。誰をか当世の法華経の  
行者として仏語を実語とせん。仏と提婆とは身と影のごとし、生々にはなれず。聖徳  
太子と守屋とは蓮華の花菓、同時なるがごとし。法華経の行者あらば必ず三類の怨敵あ  
るべし。三類はすでにあり、法華経の行者は誰なるらむ。求めて師とすべし。一眼の龜  
の浮木に値ふなるべし。

有る人云はく、当世の三類はほゞ有るににたり。但し法華経の行者なし。汝を法華経  
の行者といはんとすれば大なる相違あり。此の経に云はく「天の諸の童子、以て給使  
を為さん、刀杖も加へず毒も害すること能はず」と。又云はく「若し人悪罵すれば、口則  
ち閉塞す」等。又云はく「現世には安穩にして、後善処に生まれん」等云云。又「頭破  
れて七分と作ること阿梨樹の枝の如くならん」と。又云はく「亦現世に於て其の福報を  
得ん」等。又云はく「若し復、是の經典を受持する者を見て其の過悪を出ださん、若し  
は実にもあれ若しは不実にもあれ、此の人現世に白癩の病を得ん」等云云。答へて云は  
く、汝が疑ひ大いに吉し。ついでに不審を晴らさん。不軽品に云はく「悪口罵詈」等。  
又云はく「或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云。涅槃経に云はく「若しは殺若  
しは害」等云云。法華経に云はく「而も此の経は如来の現在すら猶怨嫉多し」等云云。仏  
は小指を提婆にやぶられ九横の大難に値ひ給ふ。此は法華経の行者にあらずや。不軽菩  
薩は一乗の行者といわれまじきか。目連は竹杖に殺さる、法華経記荊の後なり。付法  
蔵の第十四提婆菩薩、第二十五の師子尊者の二人は人に殺されぬ。此等は法華経の行者  
にはあらざるか。竺の道生は蘇山に流されぬ。法道は、火印を面にやいて江南にうつさ  
る。此等は一乗の持者にあらざるか。北野の天神、白居易は遠流せらる、賢人にあらざ

るか。事の心を案ずるに、前生に法華經誹謗の罪なきもの今生に法華經を行ず。これを世間の失によせ、或は罪なきをあだすれば、<sup>たちま</sup>忽ちに現罰あるか。<sup>しゅら</sup>修羅が帝釈をいる、<sup>こんじちよう あのかち</sup>金翅鳥の阿耨池に入る等、必ず返って一時に損ずるがごとし。天台云はく「今我が疾苦<sup>しよく</sup>は皆過去に由る、今生の修福は報将来に在り」等云云。心地観經に云はく「過去の因を知らんと欲せば、其の現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば、其の現在の因を見よ」等云云。不輕品に云はく「其罪畢已<sup>ございひつち</sup>」等云云。不輕菩薩は、過去に法華經を謗し給ふ罪、身に有るゆへに、瓦石をかほるとみへたり。又順次生に必ず地獄に墮つべき者は、重罪を造るとも現罰なし。<sup>いっせんたい</sup>一闍提人これなり。涅槃經に云はく「迦葉菩薩、仏に白して言さく、世尊、仏の所説の如く、大涅槃の光一切衆生の毛孔に入る」等云云。又云はく「迦葉菩薩、仏に白して言さく、世尊、<sup>いかん</sup>云何ぞ、未だ菩提心を発こさざる者、菩提の因を得ん」等云云。仏、此の問ひを答へて云はく「仏、迦葉に告げたまはく、若し是の大涅槃經を聞くこと有って、我菩提心を発こすことを用ひずと言って正法を誹謗せん。是の人即時に夜夢の中に於て、<sup>らせつ かたち</sup>羅刹の像を見て心中怖畏す。羅刹語つて言はく、<sup>つたな</sup>拙し善男子、汝今、若し菩提心を発さずんば、当に汝が命を断つべし。是の人惶怖し寤め已は<sup>甚</sup>って、即ち菩提の心を発こす。当に知るべし、是の人は是大菩薩なりと」等云云。いたうの大悪人ならざる者、正法を誹謗すれば即時に夢みてひるがへる心生ず。又云はく「枯木石山」等。又云はく「<sup>しょうしゆかん う あ</sup>焦種甘雨に遇ふと雖も」等。又云はく「<sup>みょうじゆ おでい</sup>明珠淤泥」等。又云はく「人の手に創あるに毒薬を捉るが如し」等。又云はく「大雨空に住せず」等云云。此等の多くの譬へあり。詮ずるところ、<sup>じょうぼん いっせんたい</sup>上品の一闍提人になりぬれば、順次生に必ず無間獄に墮つべきゆへに現罰なし。例せば、<sup>か けつ いん ちゆう</sup>夏の桀、殷の紂の世には天変なし。重科有って必ず世ほろぶべきゆへか。又守護神此の国をすつるゆへに現罰なきか。謗法の世をば守護神すて去り、諸天まぼるべからず。かるがゆへに正法を行ずるものにしるしなし。還って大難に値ふべし。金光明經に云はく「<sup>ぜんごう</sup>善業を修する者は、<sup>すいげん</sup>日々に衰滅す」等云云。悪国悪時これなり。<sup>つばさ</sup>具には、立正安国論にかんがへたるがごとし。

詮ずるところは天もすて給へ、諸難にもあえ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、<sup>こつげん ばらもん</sup>乞眼の婆羅門の責めを堪へざるゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に値ふゆへなり。善に付け悪につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本国の位をゆづらむ、法華經をすて観經等について後生をごせよ。父母の首を<sup>は</sup>刎ねん、念仏申さずば、なんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用ひじとなり。其の外の大難、<sup>ちり</sup>風の前の塵なるべし。我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず。

疑つて云はく、いかにとして、汝が流罪・死罪等を、過去の宿習としらむ。答へて云はく、銅鏡は色形を顕はす。<sup>しんのうけん ぎ</sup>秦王駿偽の鏡は現在の罪を顕はす。仏法の鏡は過去の業因を現す。<sup>はつないおん</sup>般泥洹經に云はく「善男子、過去に曾て、無量の諸罪、種々の悪業を作るに是

の諸の罪報は、或は<sup>きょうい</sup>輕易せられ、或は<sup>ぎょうじょうしゅうる</sup>形状醜陋、<sup>えぶくた</sup>衣服足らず、<sup>おんじきそそ</sup>飲食麤疎、財を求るに利あらず、貧賤の家、邪見の家に生まれ、或は王難に<sup>あ</sup>遭ひ、及び余の種々の人間の苦報あらん。現世に軽く受くるは、<sup>こ</sup>斯れ護法の功德力に由るが故なり。」云云。此の經文、日蓮が身に宛も符契のごとし。<sup>こ</sup>孤疑の氷とけぬ。千万の難も由なし。一々の句を我が身にあわせん。「或被<sup>あたか</sup>輕易<sup>ふけい</sup>」等云云。法華經に云はく「<sup>こぎ</sup>輕易<sup>きょうせんぞうしつ</sup>」等云云。二十余年が間の<sup>ぎょうじょうしゅうる</sup>輕易せらる。或は<sup>えぶくふそく</sup>「<sup>おんじきそそ</sup>形状醜陋<sup>おんじきそそ</sup>」と、又云はく「<sup>えぶくふそく</sup>衣服不足<sup>おんじきそそ</sup>」は予が身なり。「<sup>おんじきそそ</sup>飲食麤疎<sup>おんじきそそ</sup>」は予が身なり。「<sup>くざい</sup>求財不利<sup>くざい</sup>」は予が身なり。「<sup>しゅうひんせんけ</sup>生貧賤家<sup>わくぞうおうなん</sup>」は予が身なり。「<sup>わくぞうおうなん</sup>或遭王難<sup>わくぞうおうなん</sup>」等。此の經文人疑ふべしや。法華經に云はく「<sup>さくさくけんひんずい</sup>数々見擯出<sup>さくさくけんひんずい</sup>」と。此の經文に云はく「<sup>しゆい</sup>種々<sup>しゆい</sup>」等云云。「<sup>しゆい</sup>斯由護法功德力故<sup>しゆい</sup>」等とは、<sup>みじゃく</sup>摩訶止觀の第五に云はく「<sup>みじゃく</sup>散善微弱<sup>みじゃく</sup>なるは動ぜしむること能はず。今、止觀を修して<sup>ごんびょうか</sup>健病虧<sup>ごんびょうか</sup>げざれば<sup>りん</sup>生死の輪<sup>りん</sup>を動ず<sup>りん</sup>」等云云。又云はく「<sup>ふんぜん</sup>三障四魔紛然として競ひ起こる<sup>ふんぜん</sup>」等云云。我無始よりこのかた悪王と生まれて、法華經の行者の<sup>えじきでんばた</sup>衣食田畠等を奪ひとりせしこと、かずしらず。当世、日本国の諸人の、法華經の山寺を<sup>たう</sup>たうすがごとし。又法華經の行者の首を<sup>は</sup>刎ねること其の数をしらず。此等の重罪はたせるもあり、いまだはたさゞるもあるらん。果たすも余残いまだつきず。生死を離るゝ時は、必ず此の重罪を<sup>しゅつり</sup>けしはてゝ<sup>せんきょう</sup>出離すべし。功德は<sup>せんきょう</sup>浅軽なり。此等の罪は<sup>じんじゅう</sup>深重なり。権經を行ぜしには、此の重罪いまだを<sup>くろがね</sup>こらず。<sup>やく</sup>鉄を<sup>ま</sup>熱にいたうきたわざれば<sup>疵</sup>きず隠れてみえず。度々せむれば<sup>あさのみ</sup>きずあらわる。麻子を<sup>あさのみ</sup>しぼるにつよく<sup>強</sup>せめざれば<sup>強</sup>油少なきがごとし。今、日蓮、強盛に国土の謗法を<sup>あさのみ</sup>責むれば、此の大難の来たるは過去の重罪の今生の護法に招き出だせるなるべし。鉄は火に<sup>ねむ</sup>値はざれば黒し、火と合ひぬれば赤し。木をもって急流をかけば、波、山のごとし。<sup>ねむ</sup>睡れる師子に手をつくれば大いに<sup>ほ</sup>吼ゆ。

涅槃經に云はく「<sup>こけくご</sup>譬へば貧女の如し。居家救護の者有ること無く、加ふるに復、病苦<sup>けかち</sup>飢渴に<sup>せ</sup>逼められて<sup>ゆぎょうこつがい</sup>遊行乞丐す。他の客舎に<sup>こ</sup>止まり一子を<sup>こ</sup>寄生す。是の客舎の主、<sup>くちく</sup>驅逐して去らしむ。其の産して未だ久しからず、<sup>こ</sup>是の児を<sup>こ</sup>携抱して他国に至らんと欲し、其の中路に於て、<sup>もんもつ</sup>悪風雨に<sup>ほうしや</sup>遇って寒苦並び至り、多く<sup>す</sup>蚊虻・蜂螫・毒虫の<sup>す</sup>啖ひ食らふ所となる。恒河に<sup>ごうが</sup>徑由し<sup>けいゆ</sup>児を抱いて渡る。其の水<sup>ひょうしつ</sup>漂疾なれども而も<sup>ひょうしつ</sup>放ち捨てず。是に於て母子<sup>ついでとも</sup>遂に<sup>ついでとも</sup>共俱に没しぬ。是くの如き女人、慈念の功德、<sup>みょうじゅう</sup>命終の後、梵天に<sup>もんじゅう</sup>生ず。文殊師利、若し善男子有って正法を護らんと欲せば、彼の貧女の恒河に在って、子を愛念するが為に、身命を捨つるが如くせよ。善男子、護法の菩薩も亦、応に是くの如くなるべし。寧ろ<sup>むし</sup>身命を捨てよ。是くの如きの人、<sup>げだつ</sup>解脱を求めずと雖も、<sup>おの</sup>解脱自づから至ること、彼の貧女の梵天を求めざれども、梵天に自ら至るが如し」等云云。此の經文は、章安大師、三障をもって釈し給へり。それをみるべし。貧人とは法財のなきなり。女人とは一分の慈ある者なり。客舎とは<sup>えど</sup>穢土なり。一子とは法華經の信心・了因の子なり。舎主<sup>くちく</sup>驅逐とは<sup>こ</sup>流罪せらる。其産未久とはいまだ信じてひさしからず。悪風とは<sup>ちやくせん</sup>流罪の<sup>ちやくせん</sup>勅宣なり。

もんもつ 蚊虻等とは有諸無智人・悪口罵詈等なり。母子共没とは終に法華經の信心をやぶらずして頭を刎ねらるゝなり。梵天とは仏界に生まるゝをいうなり。引業と申すは仏界までかわらず。日本・漢土の万国の諸人を殺すとも、五逆・謗法なければ無間地獄には墮ちず。余の悪道にして多歳をふべし。色天に生まるゝこと、万戒を持てども万善をすすれども、散善にては生まれず。又梵天王となる事、有漏の引業の上に慈悲を加へて生ずべし。今此の貧女が子を念ふゆへに梵天に生まる、常の性相には相違せり。章安の二はあれども、詮ずるところは子を念ふ慈念より外の事なし。念を一境にする、定に似たり。専ら子を思ふ、又慈悲にもにたり。かるがゆへに、他事なけれども天に生まるゝか。又仏になる道は、華嚴の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪觀等も実には叶ふべしともみへず。但、天台の一念三千こそ、仏になるべき道とみゆれ。此の一念三千も我等一分の慧解もなし。而れども一代経々の中には此の経計り一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉ににたる黄石なり。沙をしばるに油なし。石女に子のなきがごとし。諸経は智者猶仏にならず。此の経は愚人も仏因を種ゆべし。「不求解脱・解脱自至」等と云云。

我並びに我が弟子、諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に仏界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ。現世の安穩ならざる事をなげかざれ。我が弟子に朝夕教へしかども、疑ひををこして皆すてけん。つたなき者のならひは、約束せし事を、まことの時はわするゝなるべし。妻子を不便とをもうゆへ、現身にわかれん事をなげくらん。多生曠劫にしたしみし妻子には、心とはなれしか。仏道のためにはなれしか、いつも同じわかれなるべし。我法華經の信心をやぶらずして、靈山にまいりて返ってみちびけかし。

疑って云はく、念仏者と禅宗等を無間と申すは諍ふ心あり。修羅道にや墮つべからむ。又、法華經の安樂行品に云はく「楽って人及び經典の過を説かざれ。亦、諸余の法師を輕慢せざれ」等云云。汝、此の經文に相違するゆへに、天にすてられたるか。答へて云はく、止觀に云はく「夫仏に両説あり。一には擗、二には折。安樂行に長短を称せずといふが如きは是擗の義なり、大經に刀杖を執持し、乃至首を斬れといふは、是れ折の義なり。与奪、途を殊にすと雖も俱に利益せしむ」等云云。弘決に云はく「夫仏に両説あり等とは、大經に刀杖を執持すとは、第三に云はく、正法を護る者は五戒を受けず、威儀を修せず。乃至下の文、仙予国王等の文、又、新医、乳を禁じて云はく、若し更に為すこと有れば、当に其の首を断つべし。是くの如き等の文、並びに是破法の人を折伏するなり。一切の經論此の二を出でず」等云云。文句に云はく「問ふ、大經は国王に親付し、弓を持ち箭を帯し、悪人を摧伏せよと明かす。此の經は豪勢を遠離し、謙下慈善せよと剛柔頤いに乖けり。云何ぞ異ならざらん。答ふ、大經は偏に折伏を論ずれども、一子地に住す。何ぞ曾て擗受無からん。此の經は偏に擗受を明かせども、頭破七分といふ。折伏無きに非ず。各一端を挙げて時に適ふのみ」等云云。涅槃經の疏に云

はく「出家・在家、法を護らんには、其の元心の所為を取り、事を棄て理を存して、匡しく大經を弘む、故に護持正法と言ふは小節に拘らず、故に不修威儀と言ふなり。昔の時は平らかにして法弘まる。応に戒を持つべし、杖を持つこと勿れ。今の時は峻にして法翳る。応に杖を持つべし、戒を持つこと勿れ。今昔俱に峻なれば応に俱に杖を持つべし。今昔俱に平らかなれば応に俱に戒を持つべし。取捨宜しきを得て一向にすべからず」等云云。汝が不審をば、世間の学者、多分道理とをもう。いかに諫曉すれども、日蓮が弟子等も此のをもひすてず。一闡提人のごとくなるゆへに、先づ天台・妙樂等の釈をいだして、かれが邪難をふせぐ。夫、摂受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水をいとう、水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう、折伏の者は摂受をかなしむ。無智・悪人の国土に充滿の時は摂受を前とす、安樂行品のごとし。邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とす、常不輕品のごとし。譬へば、熱き時に寒水を用ひ、寒き時に火をこのむがごとし。草木は日輪の眷屬、寒月に苦をう、諸水は月輪の所従、熱時に本性を失ふ。末法に摂受・折伏あるべし。所謂、悪国・破法の両国あるべきゆへなり。日本国の当世は悪国か、破法の国かとするべし。

問うて云はく、摂受の時折伏を行ずると、折伏の時摂受を行ずると、利益あるべしや。答へて云はく、涅槃經に云はく「迦葉菩薩、仏に白して言く 如来の法身は金剛不壞なり。而るに未だ所因を知ること能はず、云何。仏の言さく、迦葉、能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。迦葉、我、護持正法の因縁にて、今、是の金剛身、常住不壞を成就することを得たり。善男子、正法を護持する者は、五戒を受けず威儀を修せず、応に刀劍、弓箭を持つべし。是くの如く種々に法を説くも、然も故、師子吼を作すこと能はず 非法の悪人を降伏すること能はず。是くの如き比丘、自利し及び衆生を利すること能はず。当に知るべし、是の輩は懈怠懶惰なり。能く戒を持ち淨行を守護すと雖も、当に知るべし是の人は能く為す所無からん。乃至、時に破戒の者有って是の語を聞き已はって、咸共に瞋恚して是の法師を害せん。是の説法の者、設ひ復命終すとも、故持戒、自利利他と名づく」等云云。章安の云はく「取捨得宜不可一向」等。天台云はく「適時而已」等云云。譬へば秋の終はりに種子を下し、田畠をかえさんに稲米をうるることかたし。建仁年中に、法然・大日の二人出来して、念仏宗・禅宗を興行す。法然云はく「法華經は末法に入つては、未有一人得者・千中無一」等云云。大日云はく「教外別伝」等云云。此の両義、国土に充滿せり。天台・真言の学者等、念仏・禅の檀那をへつらいをそるゝ事、犬の主ををふり、ねづみの猫ををそるゝがごとし。国王、將軍にみやつかひ、破仏法の因縁、破国の因縁を能く説き能くかたるなり。天台・真言の学者等、今生には餓鬼道に墮ち、後生には阿鼻を招くべし。設ひ山林にまじわつて、一念三千の觀をこらすとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機をしらず、摂折の二門を弁へずば、いかでか生死を離るべき。

問うて云はく、念仏者・禅宗等を責めて、彼等にあだまれたる、いかなる利益かあるや。答へて云はく、涅槃經に云はく「若し善比丘、法を壞る者を見て、置いて、呵責し、驅遣し、拳処せずんば、当に知るべし、是の人は仏法の中の怨なり。若し能く驅遣し、呵責し、拳処せば、是我が弟子、眞の声聞なり」等云云。涅槃の疏に云はく「仏法を壞乱するは、仏法の中の怨なり。慈無くして詐り親しむは、是れ彼が怨なり。能く糾治せん者は、是護法の声聞、眞の我が弟子なり。彼が為に悪を除くは、即ち是彼が親なり。能く呵責する者は、是我が弟子。驅遣せざらん者は、仏法の中の怨なり」等云云。

夫法華經の宝塔品を拜見するに、釈迦・多宝・十方分身の諸仏の來集はなに心ぞ「令法久住、故來至此」等云云。三仏の未來に法華經を弘めて、未來の一切の仏子にあたえんとおぼしめす御心の中をすいするに、父母の一子の大苦に値ふを見るよりも、強盛にこそみへたるを、法然いたわしともおもはで、末法には法華經の門を堅く閉じて、人を入れじとせき、狂児をたばらかして宝をすてさするやうに、法華經を抛てさせける心こそ無慚に見へ候へ。我が父母を人の殺すに父母につげざるべしや。悪子の酔狂して父母を殺すをせいせざるべしや。悪人、寺塔に火を放たんに、せいせざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禅と念仏者とを見て、せいせざる者はかくのごとし。「慈無くして詐り親しむは、即ち是彼が怨なり」等云云。日蓮は日本國の諸人に主師父母なり。一切天台宗の人は、彼等が大怨敵なり。「彼が為に悪を除くは、即ち是彼が親」等云云。無道心の者、生死をはなるゝ事はなきなり。教主釈尊の一切の外道に大悪人と罵詈せられさせ給ひ、天台大師の南北並びに得一に「三寸の舌もて五尺の身をたつ」と、伝教大師の南京の諸人に「最澄未だ唐都を見ず」等といわれさせ給ひし、皆法華經のゆへなればはぢならず。愚人にほめられたるは第一のはぢなり。日蓮が御勘氣をかほれば、天台・眞言の法師等悦ばしくやをもうらん。かつはむざんなり。かつはきくわいなり。夫釈尊は袈裟に入り、羅什は秦に入り、伝教は尸那に入り、提婆・師子は身をすつ。薬王は臂をやく。上宮は手の皮をはぐ。釈迦菩薩は肉をうる。樂法は骨を筆とす。天台の云はく「適時而已」等云云。仏法は時によるべし。日蓮が流罪は今生の小苦なれば、なげかしからず。後生には大樂をうくべければ大いに悦ばし。